

## 優秀賞 [高校生の部]

日本の伝統文化「華道」を取り上げ、体験を踏まえて多面的な提案をしている点が好評でした。華道に対する筆者の熱意も審査委員の心に響きました。

NRI学生小論文コンテスト2010  
日本から未来を提案しよう！  
「世界のなかで日本の魅力を高めるには」

入賞作品



# 日本再華道計画

——日本に花を咲かせましょう

本庄東高等学校2年

## 鈴木 紫穂

すずき しほ

桜咲く去年の四月、高校生になった私は華道部に入部した。そこでは、生の花はもちろん、枝ものや草もの、着色された花材、輸入された珍しい花材など多くのものを見たり、触れたり、感じて学んだ。週一回の華道は楽しく興味深いものだった。こんなに素晴らしい伝統文化が日本にはあるのだということ初めて実感した。この体験を通じて、華道なら世界の人を日本に集められると思い、華道に着目した。

華道は、花を楽しみたいという気持ちがあれば、老若男女を問わず、いつでもどこでも誰でもできるものだ。もともと、四季に

恵まれた日本にはそれぞれの季節の花がある。野山にあるそれらを摘み採って飾るだけではなく、そこに一つの芸術的理念を展開させたものが華道の始まりだといわれている。外国でもフラワーアレンジメントがあるというが、これは違うものだ。フラワーアレンジメントはたくさんの花を集めることで、花そのものの美しさを表現するのに対して、華道は枝や茎の線を活かすなど、花だけでなく全体の美しさを表現する。花で誰かをもてなしたり、自分のアイディアで季節や行事を演出したりと華道の楽しみ方は多い。華道には盛り花や投入、生花などがあるが、どれも外国人の人気は高いという。二年前にホームス

## 日本再華道計画

— 日本に花を咲かせましょう

入賞作品

テイに来たオーストラリア人も盛花を体験したとき、剣山に興味を示していた。華道は日本人が思っているより海外に広く知れ渡っている。日本人よりも外国人のほうが華道に興味を抱いているといっても過言ではない。日本は、華道に興味をもっている外国人の希望に応えきれていないのではないか。

では、外国人が華道を体験できる場所をもっと増やしてみようか。実際に体験することは思い出になるし、心の豊かさにつながる。外国人が華道を体験してみたいと思って日本に来て、体験できる場が少ない。体験できる場所は限定せず、地方の観光地でも行うのはどうだろう。現在、地方の観光が衰退していると聞くので、地元のアピールも兼ねて体験できるようにすれば一石二鳥だ。近隣ではどこで体験できるかをポスターや町のパンフレットに添える。これは地域の活性化にもつながる。

しかし、ただ単に体験教室を増やせばいいというわけではない。相手は外国人なのだから通訳ができるスタッフがいることが大切だ。日本語のみの対応で華道の魅力を伝えきれないのはもったいない。日本には外国にはない独特の精神がある。例えば「侘び寂び」だ。「侘び」は理想の境地として求める質素な趣を指し、「寂び」は古びたものに感じられる落ち着いた趣を指す。実際に西欧文化のイメージとして私たちが抱く豪華でき

らびやかなものは日本にはほとんどない。つまり、質素で落ち着いた、飾らないありのままの姿で豊かさと静かさを心に秘めたものこそが日本文化の魅力なのだ。これを母国語で伝えることができなければ、魅力が半減してしまう。また、花を生ける際の指導でも母国語が必要になる。花材や花器の準備の説明から水の量や花材の長さ、角度、花と花のバランス、空間の作り出し方など、これらを日本語で説明されても理解するのは難しい。「日本に来たのだから日本語で。」と思うかもしれないが、伝統文化を体験し、華道の精神を学ぶのだから、よくわかる言語で学ぶ必要がある。

また、作品を見て楽しめるようにするのはどうか。出張で日本に来たなどで時間がないような人が、体験することは無理でも、これなら楽しめる。空港に近い場所でも華道の体験展覧会を開催する。他にも宿泊先の旅館やホテル、お土産屋や仕事の会議室などいたるところに花を生けておく。また世界進出する企業にも是非海外で季節行事とあわせて展示をしてもらいたい。海外で華道をアピールして親しみをもってもらい、日本という国に興味をもってもらいたい。以上のように、その国にあった言語で説明できることが前提条件であり、アピールと体験が必須条件だ。

さらに、春夏秋冬と季節行事をあわせて行うことが華道をアピールすることには大

## 日本再華道計画

—— 日本に花を咲かせましょう

入賞作品

切だ。海外の人には花を楽しむだけでなく、四季も楽しんでほしい。戦後、日本は驚異的な成長をし、経済大国となった。その過程で日本人はあらゆる便利なものを生み出し、ただひたすら生活の快適さだけを追い求め続けた。しかし、その一方で、それまで大切に受け継いできた様々な伝統を置き去りにしてしまった事実があるのは間違いない。普段の生活では忙殺されてはいても、伝統とは無縁でいても、いまだにお正月や桃の節句、お月見など「四季」を通して日本人が守り受け継いできたものがあり、私たちの生活の中に息づいているものがある。考えてみると、月に一度は行事がある。そしてその度に日本人は花を楽しんできた。例えば、お正月なら松や菊、千両などの正月花を生ける。桃の節句では桃の花。端午の節句では菖蒲。お月見ではすすき。そして、重陽の節句では菊というように伝統行事と花を同時に楽しんできた。こういったことを、日本人は自信をもって誇るべきである。

しかし、いくら外国人が華道に興味をもっている、日本人が知らないのでは意味がない。旅行客が華道を体験したくても、教えられる人がいないため体験できない、ということはあってはならない。私たち日本人が日本の伝統文化を今よりもさらに知る必要がある。現在は国際社会だ。将来、私たちも海外に出て働くことになるだろう。そのときに、

外国のことばかりで日本のことを何も知らないというようにならないようにしたい。日本のことを質問されても答えられないのは恥ずかしい。こういう意味でも私たちは文化を学ぶ必要がある。母国の文化を学ぶことは必要不可欠だ。

そこで私は、義務教育から華道に限らず伝統文化を学ぶ授業を作ることを提案する。私の母は華道草月流の師範である。先日、地元の小学生に華道を教えに行き、驚いて帰ってきた。最近の小学生は、日本の伝統文化である華道というものを知らないというのだ。このことから、華道の知名度が低いということがわかる。義務教育で華道の授業をすることで、子供たちにとって一枚絵を描くのと同じような感覚で、華道が身近なものになる。

現在、華道に必要な道具を売っているお店が少ないため、すぐ華道を始めたくてもできない場合もある。本物ができないなら、料理をおもちゃで楽しめるおまごセットのように華道が楽しめるおもちゃを作ってみてはどうか。花器や剣山、はさみなど華道に必要な道具。そして花がセットになっている。それらは、おまごセットでにんじんを包丁で切るのと同じように、はさみで花を切り、剣山にさせるようにする。子供たちにおまごセットと同じように遊び、華道に慣れ親しんでもらいたい。もちろん日本の子供

## 日本再華道計画

—— 日本に花を咲かせましょう

入賞作品

だけが対象ではない。日本に来た外国人観光客の人にこれを買ってもらい、華道を楽しんでもらいたい。日本のお土産としてでもよい。また、インターネットでこれを販売する。日本に来たことがない人もこれで興味をもち、日本に本物の華道を体験に来るかもしれない。

また、日本人だけでなく、外国人の華道の師範を増やしてみてもどうだろうか。前述したように外国人に華道を体験してもらうには、その国に応じた言語が必要である。そのときに通訳では説明しかできないが、師範なら指導もできる。また、その師範が海外で教室を開けば、興味をもつ人が増えるに違いない。

次世代を担う子供たちに肥料を与え、日本に大輪の花が咲くことを願いつつ、花咲じいさんのように枯れ木に花を咲かせてみよう。